資　料

パ　　リ

―― 誕生から現代まで ――

［XVIII］

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典*　訳注

総裁政府と第一帝政　（1）

総裁政府（1795-1799）[1)]

その翌日（1795. 10. 27.），行政権は今や権力の座に就いたテルミドール派により選出された 5 名の総裁から成る「総裁政府」に委任された。4 年間にわたり，元老院と五百人会の両議会と共に，政府はこれまで以上に王党派とジャコバン派の両派の反対に直面しなければならなかった。しかし市民たちは最早政治に関心を持たず，テルミドール派が破滅と貧困の真ん中に自分たちを置き去りにした後でも平和を持てたことで幸福だった。投機家連中は恥も外聞もなく金を掻き集めていた。さらにイギリスとオーストリーを相手に戦争を續行しなければならなかった。[2)]

パリでは，ロベスピエールの賛美者グラックス・バブーフ[3)]を中心に結集したジャコバン派が，共産主義の原型を描こうとしていた。彼らの首領は処刑されてしまった。共和派の失敗は王党派に希望を与えた。彼らは自分たちの支持者の一人ピシュグリュ[4)]を（ルイ 18 世の密かな推薦もあり），五百人会議長に任命したのである。五百人会は彼のために総裁 3 人の告発にまで踏み出そうとした。しかし総裁たちはこの動きを察知し，イタリヤ軍

* 福岡大学人文学部名誉教授

団の部隊を救援のため呼び戻し，1797 年の 9 月 4 日（共和暦 5 年実月 18 日）のクー・デタで自分たちの同僚カルノー[5] とバルテレミ[6] の 2 名を罷免し，王党派の脅威を払いのけたのである。しかしながら王党派の青年たち「ジュネス・ドレ」[7] は自分たちの敵をマークして大革命への敵意を示さずにはいなかった。太いステッキを握った王政主義者の洒落者「ミュスカダン」[8] たちは，街で出会ったジャコバン派をいたる所で攻撃した。これらの混乱を中止させるため，国民公会はジャコバン派のクラブを閉鎖しなければならなかった。ロベスピエールの赤い血の恐怖政治の後に，王党派の恐怖政治が反撃を開始したのである。

1795 年 10 月の王党派の暴動の後のある晩，総裁の一人で「快楽の名人」バラスが，（彼女の夫タリアンがロベスピエールの失脚に活躍したことから「テルミドール（熱月）の聖母」と呼ばれていた）タリアン夫人[9] に一人の砲兵隊長を紹介した。彼は可成り貧しい身なりで，流行に従って「犬の耳」oreille de chien 風にした長い黒髪の下の顔はやつれており，きっちり編んだ毛を背中に垂していた。総裁政府の女王になっていたタリアン夫人は，彼の視線の鋭さと制服の貧しさにショックを受けた。彼女の友人で，挑発的なキッスカール（こめかみや額の巻き毛）にした栗色の髪の植民地生れの美人ジョゼフィーヌ・ド・ボーアルネ[10] の質問に答えてから彼が辞去した後で，タリアン夫人は今の男性は将軍でイタリヤで数々の美事な勝利をあげ，王党派の鎮圧に当ってバラスを援助した人物だと言った。

リラやポプラの木立に隠れたその家は藁葺き屋根だった。しかし内部はポンペイ風の豪華さだった。三脚台のランプ，エトルリヤの壷，ギリシャ風の長椅子。熱月の聖母はここで各界各層の人々や多くの外国人を受け容れたが，その間（「なまぬるい蛇口」（穏健派の蔑称）と綽名された）タリアンがとめどなくルーヴェルやバラスに話しかけていた。彼女を中心にこの時代の「伊達男たち」les incroyables は（彼らは「r」音を発音しないので名誉にかけて誓う言葉の「誓言」parôle d'honneur を pa-ôle d'honneu と発音していた），４枚の板でつくったようにきっちりとした服装をしており，長い裾と広い折返しのチョッキ，長く尖った襟をした青い服を粋に着こなし，王党派なら黒，共和派なら赤の襟にした。こめかみに沿ってたらした髪の房と共に，彼の頭は「エクルエリック」écrouélique という大きなネクタイからちょっぴりみえるのだが，巨大なカラーの中に詰め込まれた猪首のようだった。左右不均衡に裁断されたピッタリした長ズボン，愛用の猛々しい三角帽で，彼らは強盗のようにみえた。彼らはギロチンで首を斬り落されたように，帽子を脱いでそっ

けないお辞儀をする。ある者たちは絹メリンスでふくらはぎを締めつけ，螺旋状の青い線の入った白い靴下をはいているので，脚がＸ字形に曲ってがに股で歩く人の様子をしていた。

テレサの家で，人々は夜食をとり，歌い，ハープやギターを演奏した。そして常により着物を脱いで見せる裸体を詩につくり朗讀したのである。

「半ズボンといえば，しかしながら
我らの誰もがまだ持っているとは
はっきり断言できなくなっている」

タリアン夫人は彼女のファン達をひきつれパリのあらゆる公園をのし歩いた。彼女はリシュリュー館[11]で開かれたダンス・パーティーに出席したが，参加した女性たちは，ギロチンの刃の傷痕を想起させるため，首に赤いリボンを巻き，赤いショールを肩に掛けていた。彼女は贅沢をみせびらかす。「我々はカバリュス（タリアン夫人）の富は持っていない」とある代議士は演壇で言った。タリアンは自分の妻を弁護するが，彼の自宅で開かれた大宴会で熱月の聖母のための乾杯によりすべてが終了するのだった。

テレサはこの頃総裁政府の女性リーダーだった。彼女はティヴォリ（補注 31）を流行させ，最近ドイツから入ってきたワルツを踊り，ハノーヴァー館[12]でお茶を飲み，外人たちのサークルの祭典に出席した。彼女は人々を「焦れ死にさせる」女性だった。フラスカティ[13]に，彼女は靴下どめの代りに，本物の金のリングをつけ，歩き易いからと称して腰まで縦のスリットをいれた半透明のモスリンの薄衣を纏った裸同然の姿で現われた。バラスの愛人だった彼女はリュクサンブール宮で見かけられたが，「雲（のような薄衣）を着て」，髪は短いカールにし，ぐっと盛り上った乳房の下で金のベルトをしめ，明るい色の絹の下着の中の形のいい胴，肩にかけた袖をカメヲで留めていた。彼女は深紅のカシミヤのショールを羽織っていたが，これは彼女の魅力的な色の白さを引き立てていた。彼女はこのショールを体の周りでさっと急転させるのである。

夏の公園の宵，紅おしろいもつけず，足に足飾りの環をつけ，脚や太腿を人目に大胆に曝して闊歩する下着をつけない女性たち，珍奇な服装の伊達女「メルヴェイユーズ」の女王にして司祭のテレサは，ある時は古代ギリシャ・ローマ風で，ある時は「野性の乙女」風で，またある時は肌の輝きを引き立たせるために黒いクレープの薄着を纏っていた。首筋と胸はむきだしで，他の体全体も衣を通して赤裸々にみえた。「これ以上見事に服は脱げんな」とタレイランは言った。寒冷紗のショール，縞模様の服，犠牲者風のヘア・スタ

イルという恐怖政治時代の服装を纏っていた時，タリアン夫人は多くの不快な言葉を浴びせられ反抗的な場に遭遇した。しかし彼女はこのような嫌がらせの針の攻撃に勇敢に立ち向い，反撃して再び次のような服装をこれみよがしにその翌日に身につけたのである。即ち軽騎兵の軍帽か騎手の帽子，胸高に結んだネクタイ，非常に小さいコルサージュ，ぴったりしたペチコート。彼女は流行そのものの化身であり，パリの贅沢な花であり，儚なくて絶えず更新しなければならなかったが，それでもやはり魅力だったのである。

要するに，タリアン夫人はバラスが彼女に与えた「美しいアテネ女性」の呼称を正当化していたのである。リュクサンブール宮でバラスは総裁たちを支配していた。40 歳になっても新鮮な顔色をし，生き生きとした瞳，汚職と蛮行の過去を忘れ，彼は華美な服装をしていた。三色の羽飾りをつけた大きな帽子，レースの襟，金糸で縁どりをしたオレンジ色の外套をはおった服。

当時，総裁首席は，オー‐ライン県コルマール選出の国民公会議員ルベル[14] だった。ヘンリー・スウィンバーン[15] は，パリを訪れた時，プティ‐リュクサンブール宮[16] の大広間で多くの請願書を受け取っている彼をみている。「中央につくられた柵が野次馬連中と請願者たちを隔てている。部屋は書類を手にした女たちや悪童たちや身分の卑しい男たちで一杯だったが，将軍の副官や書記たちや身なりの良い人たちは暖炉の近くに立っていた。」

虐殺の後で，人々が生きる事にかくも熱中していた頃のパリは，どのような様相をしていたのだろうか？　公共建築物の中で赤いボンネットを被った革命家はほとんどみられなかった。「彼らは避雷針のようだ」と通りすがったイギリス人は言っている。所有者の住民たちに捨てられたパリの町は物悲しく，貧しく，商取引きもなかった。軍隊と大砲がこの都会が包囲されているような印象を与えていた。三色バッジは，革命派は大きいものを，他の人たちは極めて小さいものを，という風にその人の共和主義信奉の程度に応じて着用されていた。あるいはさらに綬によって半ば隠されており，それはあたかもバッジが軽蔑の印として帽子の後につけられなくなると，バッジ自身が消え失せてしまうかのようだった。

誰もが闇取引きをしていた。お茶の会で，人々は砂糖や石鹸や皮靴を話題にした。悪童たちは群をなし，口に爪楊枝をくわえ，手をズボンのポケットにつっこんで通りを練り歩いた。パン屋の前には行列ができる。金貨をヤスリで削って金の屑をつくろうとする。アシニア紙幣は廃止しなければならなくなり（400 億フランが発行されていた），三分の二が破棄されて解決した。住んでいる人の富の印として，家の入口や窓や塀につくられた門などを対象とした新税が制定される。貧民救済が組織化される。徴兵制が施行され，これ

以後すべてのフランス人の青年は兵役の義務を果さなければならなくなる。メートル法が制定される。エコル・ノルマル[17]，エコル・ポリテクニック[18]，工芸学校[19]，国立音楽学院[20]，国立古文書館[21]が創設される。プティ‐ゾーギュスタン修道院[22]にルノワール[23]は「フランス記念物博物館」を設置し，大革命の蛮行から逃れた美術品を蒐集する。

総裁政府は王政時代そのままの行政組織をパリに施行する。法令によってパリは12の市行政地区即ち12区に分割される。別の法令により，貧民救済の口実で入市税が，市内への商品搬入の権利を再び確保する。そのための総括徴税請負人[24]の塀を完成させる。大工業が出現する。王室庭園は植物園[25]になる。風俗の軽薄さに対して —— 純粋にパリ的現象だが —— 新しい宗派「敬神博愛教」[26]，神と人間の友であり言うなれば至高の存在の信者たちの宗派が立ち上がったのである。総裁政府は彼らにパリのほとんどすべての教会の使用を許可したので，彼らはノートル‐ダム大寺院を「理性の神殿」，サン‐テチエンヌ‐デュ‐モン教会[27]を「孝心神殿」，サン‐チュスタッシュ教会[28]を「農業神殿」，サン‐ニコラ‐デ‐シャン教会[29]を「聖歌教会」，サン‐シュルピス教会[30]を「勝利の神殿」と呼んだ。しかしこの新宗派の信者は年々減少し，やがてカトリックに統合されてしまうのである。

（続く）

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
（訳　注　XVIII）

1）Directoire：フランスの第一共和政の時，共和暦 3 年の憲法により，五百人会と元老院と協力して国家を統治すべき行政権を委任された政府。1795 年 10 月 26 日（共和暦 4 年霧月 5 日）に設置され，1799 年 11 月 9 日（共和暦 8 年霧月 18 日）まで存續した。総裁政府は五百人会と元老院から指名された 5 人の総裁から構成され，毎年 1 名づつ改選され，再選はされない。彼らは国務大臣や将官を任命したが，行政，立法の実質的指導権は五百人会に属していた。総裁は考慮すべき計画を立案しようとする時に五百人会を招集できたにすぎない。最初の総裁は Louis Marie La Revellière-Lépeaux (1753-1824)，Louis François Letourneur (1751-1817)，Jean-François Rewbell (1747-1807)，Paul, vicomte de Barras (1755-1829)，Lazare Nicolas Marguerite Carnot (1753-1823) である。但し Carnot は選任されたが辞退した Sièyes の代りであった。La Revellière-Lépeaux は内務及び司法関係，Letourneur は海軍，Rewbell は外交，Barras は警察，Carnot は陸軍をそれぞれ担当し，本拠をリュクサンブール宮に置いた。彼らの後任になったのは François, marquis de Barthélemy (1747-1830)，Philippe Antoine, comte Merlin，通称 Merlin de Douai (1754-1838)，Nicolas Louis, comte François de Neufchateau (1750-1828)，Jean-Baptiste Treihard (1742-1810)，Roger, comte Ducos (1754-1816)，Louis Gérome Gohier (1746-1830)，Jean-François Auguste Moulin (1752-1810)，Emmanuel Joseph, comte Sieyes (1748-1836) である。貴族に代って勃興したブルジョワジーと地主層の農民を政権基盤とし，フランス大革命の成果をこの支持層の安定を目標に，その手段として制限選挙と自由主義経済の確立を企図した。しかし国内的にはアシニア紙幣の大暴落により財政破綻は危険的状況あった。流通しているアシニア紙幣は 190 億フランに達していたが現実的価値は僅か 1 億 5 千萬フランに過ぎなかった。政府はアシニア紙幣の原版を破棄して発行を停止し（1796. 2. 19.），貨幣の信頼を取り戻そうとするが，大資本家からの借入金や征服地から軍隊が送ってくる賠償金や略奪した財宝なども焼石に水で，財政問題の解決には失敗してしまう。国民は紙幣を信頼せず政治経済の動向に左右されない金貨への愛着をますます強くしていく。止むを得ず政府は高利の借金をし，次年度の収入に手をつけ，国有財産を叩き賣ったが，これは不法な投機を

誘発し，巨利を博した投機家に対する庶民の怒りを暴発させた。しかもこの不正畜財の一人にバラスがいた事が，総裁政府に対する人民の怒りを増大させ，バブーフらによる政府打倒の陰謀になるのである。しかしこの陰謀は密告により未然に防止され，首謀者バブーフの処刑によって終結した（1797. 5. 26.)。政府はこの左派からの攻撃と同時に，右派の王党派からの攻撃にも対処しなければならなかった。幸いオッシュ将軍らによるヴァンデの乱の鎮圧成功により（1796. 2〜3.)，王党派の武力暴動は失敗したが，共和暦 5 年（1797. 3. 31.）の五百人会の選挙では王党派と穏健派が勝利した。中道多数派を維持しようとした政府の選挙干渉にもかかのらず，三分の一の改選議員の大部分を占める 182 名が王党派議員で，元老院を含めた両院で王党派議員は約 330 名にも達した。それに対し再出馬した元国民公会議員 216 名のうち再選された者は僅か 11 名に過ぎなかったのである。敗北を自覚した政府は共和暦 5 年実月 18 日（1797. 9. 4.）に軍部の協力を得てクー・デタを敢行して 53 名の王党派議員を国外に追放し，49 の県の選挙を無効とした。

しかし政府のこの暴挙は自ら国家の根幹となる憲法を蹂躙しただけでなく，いざという時に軍事力に頼らざるを得ない不安定さを露呈したものだった。このクー・デタにより今度は議会の左傾化が始り，1798 年 4 月の選挙では左派のネオ・ジャコバン派議員が多数当選するという結果になる。かくして政府は再び軍部と結託し，共和暦 6 年花月 22 日（1798. 5. 11.）に解散前の議会が選挙結果を審査する権利をもつという法令を可決，8 つの県の選挙を無効として 106 名の左派議員の当選を否認した。このような政治的不安定のために，一向に改善しない経済状態に加えて，フランス国内の混乱に乗じた第二次対仏同盟の結成などの外圧を眼前にした国民は，総裁政府にかわるより強力な指導者による安定政権の誕生を切望するようになった。この国民の期待に叶ったのがイタリヤ戦役以来の常勝将軍であり武勲の栄光に包まれたナポレオン・ボナパルトであった。彼は政府内部の協力，シェイエスとロジェ・デュコの 2 人の総裁の協力の下に共和暦 8 年霧月 18 日（1799. 11. 9）のクー・デタにより総裁政府を打倒し，彼ら 3 人の統領による新政府を発足させたのである。独裁を極端に警戒したため権力が細分化された総裁政府は，重大な緊急事態に対処できず，特に財政問題の解決にはことごとく失敗し，また左右両派の暴動鎮圧に警察と軍隊の武力に頼ったため，政治に対する軍の発言力が増大し，これが総裁政府の致命傷となったのである。

2）総裁政府時代の対外戦争では，やはりナポレオンの活躍が最も華々しい。1796 年 3 月にイタリヤ遠征軍司令官となるや，イタリヤ駐在のオーストリー軍を撃破，97 年 10 月

17 日にカンポ・ホルミオ条約を締結し，ベルギーとロンバルディアを確保，この戦闘の間に多くの財宝をフランスに送り，政府の窮乏を救った。1798 年 5 月からのエジプト遠征は軍事的には失敗だったが，同行した顧問団の活躍により古代エジプト文明研究の第一歩となるヒエログリフ解讀の第一級資料ロゼッタ・ストーンの発見など，文化的意義が大きい。

３）François Emile Babeuf，筆名 Graccuhus Babeuf（1760-1797）：フランスの革命家，社会思想家。サン‐カンタン生れ。84 年にピカルディーのロワの土地台帳監査官となり封建制の悪弊を知る。ルソーやモレリーなどの影響を受け次第に共産主義的考えを抱き，私有財産廃止の思想となる。大革命勃発後にソンム県の行政官，パリ市及び政府の食料委員会の役人として活躍した。人民の主権は階級制度の抑圧と私有財産の廃止によってのみ実現し，農地はすべての人の労働によりすべての人に奉仕する方法で共有されるべきという農業改革を提唱した。一時急進分子として逮捕されるが，釈放後は宣伝活動に従事し「出版自由新聞」*Journal de la Liberté de la Presse*〔1794. 7.-9.〕（後に「人民護民官」*La Tribun du Peuple*〔1974. 10.-96. 8.〕と改題）を発行，ロベスピエール派打倒の時はテルミドール左派として参加した。しかしブルジョワ派に憎まれ逮捕投獄された（94-95）。獄中でジャコバン派のマラーの影響を受けた。出獄（95. 10.）後，アシニア紙幣暴落に端を発した経済不安から総裁政府を打倒する新しき革命を断行し完全な社会の建設を企図するようになった。そのための同志らと秘密結社「平等者協会」la Conspiration des Egaux を結成した（1796 年春）。シルヴァン・マレシャルが編纂したこの結社のスローガン「平等者宣言」*le Manifeste des Egaux* は次のように述べている。大革命は新しい特権階級のためになされたにすぎない欺瞞であり，新しい革命によってのみ全体的原状回復が実現すると。そして総裁政府を打倒し，1793 年憲法を復活すべきである。バブーフは獄中で革命のヴェテランから学んだ革命戦術と陰謀の計画を実行すべく，同志らと共に軍隊や警察内部にシンパをつくり民衆と共に一斉蜂起して政府を打倒し，人民の独裁により，すべての私有財産を社会化，平等者の理想社会を実現しようとした。しかし決起の前日（1796. 5. 10.）に密告により逮捕され，ヴァンドームの高等法院で裁かれ死刑の判決をうけ，1797 年 5 月 27 日同志ダルテと共に処刑された。彼はバブーフ主義の体現者として暴力革命の開祖となったのである。

４）Charles Pichegru（1761-1804）：フランスの軍人。農民の子だったが軍人を志し，ブリエンヌ幼年学校に入学し，18 歳で同校の数学講師となったが，彼の生徒の一人にナ

ポレオンがいた。卒業後砲兵としてアメリカ独立戦争に参加，1789 年に軍曹に任官したがガール志願兵大隊の司令官に選出され，ライン軍団に所属し，武勲をたてて昇進，またジャコバン派やサン‐ジュストの後援もあってオッシュの後任として北部方面軍司令官となった（1794. 2.）。1794 年から 95 年にかけてオランダを征服，テクセルで氷で閉じ込められたオランダ海軍を捕虜にした（1795. 1. 30.）パリに帰還し，共和暦 3 年芽月 12 日（1795. 4. 1.）のジャコバン派指揮の国民公会への叛乱を鎮圧，ライン・モーゼル方面軍司令官になる。この頃彼はコンデ公からの買収に応じたらしい。その内容はピシュグリュに対して現金 100 萬フラン，年金 20 萬フラン，アルトワ公領の贈与，アルザス地方の支配とシャンボール城の提供という莫大なものだった。彼がライン河を渡河したジュールダン軍をオーストリー軍に介入せず見殺しにしたのはこの買収に応じたためとみられる。政府は彼の裏切りを察知し，司令官を罷免したため（1796. 3.），彼はしばらく田舎暮しをしたが，五百人会議員に選出された。彼は王党派議員の指導者となり，共和暦 5 年実月 18 日（1797. 9. 4.）の政府顛覆のクー・デタを計り逮捕されカルノーらと共にギアナに流刑に処せられた。しかし脱走して英国に渡り，後に密かにパリに潜入しカドゥーダルらの王党派と協力し，ナポレオン暗殺を計画するが友人に裏切られ逮捕されタンプル塔に監禁された。しかし 3 週間後に独房で縊死しているのが発見された（1804. 4. 6.）。

５）Lazare Nicolas Marguerite Carnot（1753-1823）：ノルマンディー地方のコート‐ドール県ノレーの出身の軍事技術家，政治家。技術教育を受け工兵将校として北フランス各地で勤務，大革命勃発に当り改革派に共鳴し，パ・ド・カレー県から立法議会に選出された（1791）。ついで国民公会議員となり（1792），ルイ 16 世処刑に賛成投票した。軍事委員会の委員となり，国民衛兵軍の武装の強化と国王親衛隊の解散を断行した。1793 年に北部方面軍の査察官として派遣され，退却を繰り返していた将軍を罷免し，自らフランス軍の先頭に立って勇敢に戦い，ワッチニーの戦いの勝利に貢献した。同年，公安委員会の委員に選出され，軍事問題の解決に専念，軍需産業の整備と振興，徴兵制施行により 14 軍団の近代的軍隊を創出，卓越した作戦指導により戦局を好転させ，フルリュスの勝利（1794. 6. 26.）でネーデルランドのオーストリー軍を撃滅し，北方からの脅威を除去したのである。かくして彼は「勝利の組織者」Organisateur de la victoire の称号を得た。公安委員会ではロベスピエール派と対立したが，テルミドールのクー・デタの時は中立的立場に立った。国民公会議長となり（1795），理工科大学，工芸学校を創設，またメートル法制定にも尽力した。1795 年に総裁政府の一員となり 2 回議長を務めたが，実月 18

日（1794. 9. 4.）のクー・デタで王党派と目されギアナ流刑を宣告されたがドイツに亡命した。霧月 18 日（1799. 11. 9.）のクー・デタにより政権を掌握したナポレオンに呼ばれて帰国（1800），軍事担当相となるが法制委員会でナポレオンの武断政治に反対して政界から引退した（1802）。この閑暇の間に彼は数学の研究と軍事問題の著述に没頭している。しかしフランスが外国軍の侵略の脅威にさらされ始めた 1814 年，彼は祖国防衛のためナポレオンに協力し，アントワープ防衛を一任され，皇帝が降服し退位（1814. 4. 6.）した後まで任務を遂行，1814 年 5 月 5 日にやっと開城に応じたのである。百日天下では内相となったがナポレオン敗北後はルイ 16 世弑逆者として国外に追放され（1816），ワルシャワついでマグデブルグに移り，同地で歿した（1823. 8. 3.）。1889 年に彼の遺骸はフランスに戻されパンテオンに祭られた。彼は多くの著作を残したが，『要塞防衛概論』*De la défense des places fortes en général* 3 巻（1809）はヨーロッパ軍隊の教典となった。また微積分学などの学術書には『幾何学の図形の相関関係について』*De la corrélation des figures de géométrie*（1801）などがあり，また 1814 年 7 月に国王にあてた『回想』*Mémoire* は，第一次王政復古の政府を厳しく非難していることで有名である。

6）François, marquis de Barthélemy（1747-1830）：南仏のブッシュ‐デュ‐ローヌ県オバーニュ出身の政治家。伯父で作家のジャン‐ジャック・バルテルミ（1716-1795）が外相ショアズール（1719-1788）の友人だったので，ショアズールの知遇を得て外交官になり，1792 年から 97 年までスイス駐在大使を務め，この間にプロシャとスペインを相手にバーゼル条約を締結した。1797 年 5 月総裁政府の一員になったが，実月 18 日（1794. 9. 4.）のクー・デタでカルノーらと共に王党派と目されギアナに流刑になった。幸い脱走に成功し，霧月 18 日のクー・デタの後に帰国し，ナポレオンに仕えて元老院議員（1800），ついで伯爵に敍せられた。カルノーとちがい，彼はナポレオンを見棄ててルイ 18 世の幕下に参加，王政復古の憲章発布に貢献した。王政復古時代に国務相を務め（1815-19），侯爵となった。カルノーと対照的な人生である。

7）Jeunesse dorée：熱月 9 日のクー・デタの後，左派の「サン‐キュロット」たちに対抗するため結集した右派のブルジョワジー階級の青年たち。彼らは自分たちの存在を誇示するため殊更に目立つ色彩と奇矯な服装を纏ったためこの呼称がある。彼らはジャコバン派を叩きのめすためステッキを手にしてパリ市中を闊歩した。ダントン派の一人 Louis Stanislas Fréron（1765-1802）が「ジュネス・ドレ」のリーダーと目された。

8）Muscadins：ジャコバン派の国民公会議員フランソワ・シャボー（1759-1794）が鎮

圧に向った国民公会の軍隊に反抗したリヨン市の青年たちを指す言葉として，1794 年頃に創出された言葉だったが，熱月 9 日のクー・デタ以後は，奇抜な服装をした「ジュネス・ドレ」の青年たちを指すようになった。その理由は彼らの長髪から「麝香」musc の香水が匂っていたからである。

9） Jeanne Marie Ignace Theresia Cabarrus, comtesse de Fontenay, Madame Tallien, princesse de Chimay（1773-1835）：マドリッド近郊で生れ，父はスペインの銀行家。16 歳でボルドー高等法院顧問官ダヴィ・ド・フォントネ伯爵と結婚したが 1793 年に離婚。革命の激化によりスペインへ帰国しようとするが反革命分子の容疑で逮捕された。しかし彼女の美貌と才智に，当時ボルドーに派遣されていた国民公会議員タリアンが魅了されてしまう。愛人とした彼女の感化でタリアンは多くの容疑者を釈放した。この寛大な処置のためロベスピエールの失脚後，彼女は「熱月の聖母」Notre-Dame de Thermidor と綽名された。彼女はその洗練された行儀作法とシックなスタイルで流行の尖端を行く社交界の花形となり，豪奢な生活を送りかつ浮名を流した。総裁政府時代に流行したギリシャ風の服装は彼女の発案である。彼女はやがてタリアンと離婚，金満家の銀行家の愛人となるがこの男とも 1802 年に別れ，プロヴァンスの名家カラマン伯爵家のフランソワ・ジョゼフ・ド・カラマン（1771-1842）と結婚した（1805）。彼は後に prince de Chimay となる。彼女は夫の居城で恋多き波瀾の一生を終える。

10） Joséphine，旧名 Marie Joséphe Rose Tascher de la Pagerie, vicomtesse de Beauharnais, Impératrice de Napoléon（1763-1814）：マルティニック島の港長で海軍士官の娘。1779 年にパリに上京し 16 歳でアレクサンドル・ド・ボーアルネ子爵と結婚し（1779），ウジェーヌとオルタンスの二児を生む。幸福な生活だったが，夫ボーアルネ将軍がマインツの会戦の敗北の責任を問われ処刑され（1794. 6. 23.），同時に彼女も一時拘留されたが熱月 9 日のクー・デタの後に釈放された。生活のため彼女の美貌に惚れ込んでいたバラスの愛人となり，社交界の花形の一人として復活した。総裁政府時代のサロンで可成り放縦な生活を送りバラス以外にもタリアンなどとも関係したといわれる。しかし将来を真剣に考え始めた矢先に有望株として出現したのがナポレオン・ボナパルトであった。それまで兵営と戦場での毎日で華やかな上流社交界に不慣れな青年将校は，眩いばかりの美人のジョゼフィーヌに一目惚れしてしまう。そろそろ彼女と手を切りたいと思っていたバラスもこれを好機として彼女の結婚実現に協力した。彼としては部下のナポレオンに恩も着せられて正に一石二鳥だった。結婚は 1796 年 3 月 19 日につつましく挙行される。

ジョゼフィーヌを熱愛していたナポレオンは彼女と別居する事を望まず，イタリヤ戦役中もエジプト遠征中も彼女を手元に呼びたかったのである。しかもパリで独身生活を送っていた彼女の不行跡はナポレオンの耳にも達し，彼は嫉妬に苦しむのだった。しかし帰国すると彼女の魅力に抗する事はできなかったのである。彼女は夫の急速な立身出世を享受し，総領政府時代を通じ社交界のみならず政界にも多大の影響力を駆使した。夫が皇帝に即位すると共に彼女も皇后となり（1804. 5. 18.），教会による正式の婚儀をあげた。しかし 6 歳も夫より年上の彼女は，ナポレオンが切望する帝国の後継者たる皇太子を産むことができず，皇帝世襲制の障壁の前で離婚に応じざるを得なかった（1809. 12. 16.）。多くの財産を贈与され皇后の称号を保有する事を許され，ユール県のナバール城やパリ近郊のマルメゾンの離宮で暮した。1814 年ロシア皇帝アレクサンドルの愛を得たといわれるが，夫ナポレオンの退位（1814. 4. 6.）から 2 か月半後の 6 月 23 日マルメゾンで歿した。前半生の華美な社交生活と全く対照的な寂しく孤独な死だった。

11）Hôtel de Richelieu：パリ第 4 区サン－ルイ島の上流部分の下流に向って左側にあるベチューヌ河岸 18 番地にある。この建物は名建築家ルイ・ル・ヴォーの手になり，国王の司厨長トマ・ド・コマンのために建造された。その後は譲渡や賣却が繰り返され，1702 年に当時の所有者アンヌ－カトリーヌ・ド・ノアイユが，リシュリュー枢機卿の甥の息子アルマン－ジャン・ド・ヴィニュロ・デュ・プレッシ，リシュリュー公爵によって彼の子供のフロンサック公爵と結婚させられるが，この公爵（1696-1788）が後にリシュリュー元帥となり，そこからこの邸がリシュリュー館と呼ばれるようになった。彼は愉快な宮廷人で敏腕な外交官でもありかつ勇敢な軍人だった。また 3 度も結婚をし，その間にも多くの恋人をつくり浮名を流し，更に決闘や陰謀の一味の嫌疑で 3 度もバスチーユに投獄されている。

12）pavillon de Hanovre：パリ第 2 区のルイ－ル－グラン街 34 番地にあった Hôtel d'Antin の別館。本館のアンタン館は 18 世紀初頭頃に建築され，その後多くの所有者の手を経て，1713 年にアンタン公爵が買収した。彼は北側の沼地に堤防を築いて立派な庭園にし，館も手を入れてパリで最も豪華な住宅に改造した。公爵の死後，この邸は 2 度転売され，1756 年にリシュリュー元帥が購入した。ロワイヤル（現在のヴォージュ）広場の邸が手狭になったためである。オーストリー継承戦争で武勲をたてた彼は，1748 年元帥に昇進，1756 年からの七年戦争においては，難攻不落といわれたポール－マオンからイギリス軍を駆逐し，翌年には 1 か月もかけずにハノーヴァーを陥落させた。彼はこの時

に部下の将兵たちの掠奪を黙認し，自分も莫大な戦利品を手中した。この不正利得で，アンタン館の庭に壮麗な別館を建設させたので，人々はこの建物を「ハノーヴァー館」と呼んだのである。

元帥はこの建物をサロンと称していたが，二階建ての立派な独立家屋で，煉鉄製の大きく美しいバルコニーを備え，繊細な彫刻を施した大きな 3 つの窓を持ち，左右に翼棟が延びている。さらに手摺のついた屋上がある。リシュリュー元帥はこの館で夕食会を開き，自分の快楽のためにも使用したが，後にシャルル 10 世となる若きアルトワ伯に恋の手解きを伝授したという。

大革命によりアンタン館もハノーヴァー館も革命政府により没収され民間に賣却される。アンタン館はレストランを備えた家具付きホテル「リシュリュー館」として帝政時代にはパリの 4 大ホテルの一つとなり繁昌したが，1839 年に取り壊され姿を消した。タリアン夫人たちが出入していたのは，前記の注の「リシュリュー館」でなく，このホテルかもしれない。

ハノーヴァー館はその庭園と木立ちにより祭典やダンス・パーティーや音楽会に利用された。1798 年 7 月 14 日の革命記念日には，タリアン夫人やジョゼフィーヌ・ボナパルトが多数の取り巻きを引き連れて参列している。その後も催し物会場や商品展示場などに使用されたが，1930 年にソー公園に移築され現存している。

13）Frascoti：第 2 区と第 9 区に延びるモンマルトル大通り 23 番地とそれに隣接するリシュリュー街 112 番地にひろがっていた土地に収税長官タイユピエ・ド・ボンディが建築した建物が転売され，1796 年にナポリ出身のアイスクリーム商ガルシが購入し，ナポリで有名な「フラスカティ」そっくりの賭博場，レストラン，家具付きホテルに美々しく改造した。庭園は夜間照明され，モンマルトル大通りからリシュリュー街を横切り，現在のヴィヴィエンヌ街（当時はまだなかった）まで広がっていて，入場料は 3 フランだった。人々はここで愉快に飲みかつ食べ，踊り，お忍びの貴夫人たちとのアヴァンチュールを楽しみ，イリュミネーションや花火に興じたが，特に午後 4 時から午前 2 時まで開場された賭博場で楽しんだのである。フラスカティは総裁政府時代に全盛を極めたがその後人気を失い，1809 年にガルシが死んだ時には債務支払いが不可能になっていた。

14）Jean François Rewbell（1747-1807）：ドイツと国境を接するオー‐ライン県コルマールの出身で同市の弁護士会長から三部会議員になり（1789），ついで国民議会においては専門の法律知識を使って活躍し議長に選出された（1791）。国民公会議員としてはモンタ

ニャール派に所属し，ルイ 16 世処刑を主張したが，軍事顧問としてマイヤンスからヴァンデに派遣されている間に，国王処刑の投票が行われ，彼は弑逆罪を免れることになった。ロベスピエール打倒の熱月クー・デタの主役となり，ジャコバン協会を解散させ，公安委員会，保安委員会の委員を務め，五百人会議員（1795）から，総裁の一人に選出された。財務，司法，外務を担当し，96 年に総裁首席となった。王党派の巻き返しに際しては，バラス　ラ・ルヴェリエール‐レポーと協力し，共和暦 5 年実月 18 日（1797. 9. 4.）のクー・デタを断行し，同僚だったカルノー，バルテルミをはじめ 53 名の王党派議員を追放した。しかし彼はこれにより軍部の抬頭と独裁を予感してか，ナポレオンの霧月 18 日のクー・デタの後に政界を引退した（1799）。

15）Henry Swinburne（1752-1803）：イギリスの旅行家。フランスの修道院で教育を受け，莫大な財産に恵まれ，フランス，スペイン，シシリー，イタリヤ，オーストリー各国を旅行した。裕福である上に極めて独創的かつ気転の利く才能の士であった彼は，到る所で歓迎され，ナポリ王フェルディナンド 4 世は 1 年以上も彼を手元にはべらせ，オーストリー女王マリア‐テレジアはごく内輪の集いに彼を参加させた。マリ‐アントワネットも彼の機知横溢した会話に魅了され，サン‐ヴァンサン島に広大な土地を贈与している。彼はカトリック教徒であるため，熱望していた外交官になかなか就任できなかった。念願叶って 1796 年に英仏捕虜交換の折衝のためパリに派遣されたが，残念ながらこの交渉には失敗してしまう。晩年になり不幸にも財産の大半を失った彼はトリニダード島での下級役人として生活しなければならず，その地で客死した。スペインやシシリー島の旅行記の他に『前世紀末のヨーロッパの宮廷』*Les Cours d'Europe à la fin du siècle dernier*（1841 年，ロンドンで出版の 2 巻本）などの著作がある。書翰体の形式をとっているこれらの作品で，スウィンバーンは鋭敏で繊細な観察者である事を示している。またその文体は単純優雅でユーモアに溢れ，『センチメンタル・ジャーニー』の作者ローレンス・スターン（1713-1768）を想起させる。

16）Le Petit-Luxembourg：第 6 区と第 15 区を走るヴォージラール街 17 番地にある。1546 年当時はまだ田舎だったこの土地に，顧問官アレクサンドル・ド・ラ・トゥーレットがこの邸を建築させた。しかし彼は建築費が払えず，この邸は差押えられて競売され，1564 年にローベル・ド・アルレー・ド・サンシが入手，彼の死後，未亡人が 1570 年にタングリ公フランソワ・ド・リュクサンブールに売却した。彼は僅かの間しか此処に住まなかったが，これ以後この建物は彼の名をもって呼ばれるようになった。1612 年 4 月 2 日，

常日頃この邸を欲しがっていた王妃マリ・ド・メディシスが購入，1627 年にリシュリュー枢機卿に贈与した。彼はこの屋敷を改造し Palais Cardinal が完成するまで此処に住んだ。1639 年にリシュリューは姪のエギヨン公夫人にこの邸を贈与し，これ以後，主として皇族や大貴族の間に相続譲渡されていく。総裁政府時代には総裁たちが住み，帝政時代はジョゼフ・ボナパルトが住んだ。王政復古時代にコンデ家の所有となったが，1825 年に国王に譲渡され，それ以後リュサンブール宮の付属邸となり，元老院ついで現在の上院議長官舎として使用されている。

17）Ecole normale supérieur：パリ第 5 区ウルム街 45 番地にある。共和暦 3 年霧月 9 日（1794 年 10 月 30 日）に国民公会により設立された。発起人は国民公会の公共教育委員会議長ジョゼフ・ラカナル（1762-1845）である。司祭で哲学教授でもあった彼は大革命のもたらした混乱を健全な公教育による新社会人により鎮静させようとし，そのためにはあらゆる教科の教授に精通した優秀なる教員の教育を緊急の課題としたのである。教育期間は 2 年間で，教室はラカナルの奔走によって廃棄を免れた旧王室庭園，革命政府によって植物園として再生された付属建物の自然史博物館に設置された。1795 年 1 月 19 日に開校されたこの学校の教授は当時の碩学を揃えた豪華な顔触れである。数学はラグランジュ，ラプラス，モンジュ，物理はアユイ神父，博物学はドーバントン，化学はベルトロ，農業はトゥアン，地理学はビァシュ，史学はヴォルネー，倫理学はベルナン・ド・サン‐ピエール，文学はラ・アルプ，文法学はシカール，経済学はヴァンデルモンドであった。愛国的民主主義を教育理念としたこの新学園はしかしながら翌年に閉鎖されてしまう。この学校を再開したのは帝政という新体制を支える人材を必要としていたナポレオンであった（1808. 3. 17.）。学生は 3 年間の寄宿生活の間に，文学と科学を教育する技術を体得する。毎年リセの生徒 17 歳以上の者から試験により選抜し入学を許可する。新入生は寄宿生活の間上級生の先輩の中からチューターを選び，学業上の指導を受ける。これらの原則は王政復古になっても引き継がれた。この学校は教育界に優秀な人材を供給し続けたのみならず，文学や科学の領域においても顕著な業績をあげた文学者や科学者を輩出している。1813 年に第 5 区のロモン街 28 番地のサン‐テスプリ神学校内に設置されたが，反宗教的理念を抱く反抗分子の巣窟となったため，在学生 54 名は放校処分を受けた後に閉校となった（1822）。1826 年に再建され，第 5 区のサン‐ジャック街の旧プレシス校跡に設置され，1847 年ジゾールの手になる新校舎の落成により現在地のウルム街 45 番地に移転した。1933 年から 1937 年にかけ，物理，科学，生物学の広大な研究所がギルベールにより建造

され偉容を誇っている。

18）Ecole polytechnique：橋梁や堤防などの建設に当る土木工学関係の技術者，鉱山採掘の技師，砲兵士官や工兵士官，船舶建造技師など多様な技術者を養成する目的で創設された専門学校。土木工学校長ロンブラルディーが最初の発案者で，彼はこの技術綜合大学の創設を海相で数学者でもあったガスパール・モンジュ（1746-1818）に提案，モンジュはカルノーと共にこの計画を公安委員会に採択させた。共和暦 3 年葡萄月 7 日（1794 年 9 月 28 日）の法令により「公共事業中央学校」Ecole centrale des travaux publics として発足し，翌 1794 年 9 月 1 日の法令で「理工科大学」Ecole polytechnipue と改称された。教授陣はエコル・ノルマルと同様に当時の一流の学者たちで，数学はラグランジュ（1736-1813），機械工学及び力学はプロニ（1755-1839），幾何の切体学ステレオトミはモンジュ，建築学はバルタール（1765-1846），化学はフルクロワ（1755-1809），ヴォクラン（1763-1829），シャプタル（1756-1832）らである。初年度の入学生は 349 名，寄宿生活をし手当として年 1.200 フランが支給された。校舎はブルボン宮に設置された。この新設校はこれらの教授陣とその教育によりたちまち有名になった。モンジュはナポレオンのエジプト遠征に同行するが，その時 39 名の学生を引率しエジプトの実地研習を行っている。五百人会は学生定員を 200 名に減員する。ナポレオンは，1805 年 7 月 16 日の法令でこの学校を軍隊化し，軍旗を授与している。それに「科学と芸術は祖国のために」という言葉が記されている。1814 年，ナポレオンの最初の退位の時，皇帝を守って出陣しようとした学生たちを彼は押えて言った。将来ある金の卵から生れた鳥を雛のうちに殺すには忍びないと。皇帝は彼らが将来立派な砲兵士官や工兵士官に成長してくれる事を願ったのである。学生たちは将官の学長の下で兵営生活をし軍服を制服とするが，それは今日まで変っていない。しかし現在では卒業して軍人になる者は少数になったが，かってはジョフル将軍（1852-1931）やフォシュ将軍（1851-1929）などの名将を輩出している。政治家ではサディ・カルノー大統領（1837-1894），アルベール・ルブラン大統領（1871-1950），実業家では自動車会社のシトロエン（1878-1935），学者ではオーギュスト・コント（1798-1857），アンリ・ポワンカレ（1854-1912）などが卒業生である。学生たちは 1814 年のパリ防衛に活躍したが，その自由主義的思想のため，王政復古と共に解散させられる。しかし翌年には復学する。彼らは 1830 年の 7 月革命においても，1848 年の 2 月革命においても王政打倒に積極的な活動をしている。

19）Conservatoire national des Arts et Métiers：工業に科学を応用するための高等技

術教育機関で，パリの第 3 区と第 4 区にまたがるサン‐マルタン街 292 番地にあったサン‐マルタン‐デ‐シャン小修道院の建物の中に，1794 年 10 月 10 日，国民公会によって設置された。発案者は哲学教授でもあったアンリ・グレゴワール神父（1750-1831）である。この学校の前身は，自動織機の発明などで当時有名だった機械技師ジャック・ド・ヴォカンソンが蒐集した工作機械や道具類の保存博物館である。彼はこれらを公開して職人たちの教育に利用していた。彼はその他に動物などの自動人形の製作者としても有名で，これら多くの自動人形も展示していた。その場所はパリ第 11 区のシャロンヌ街 51 番地にあったモルターニュ館である。彼はこの邸に 1746 年から住み，1782 年 11 月 21 日，73 歳で死去するが，その時自分のコレクションを国に寄贈した。国民公会はこのコレクションに大革命によって廃止された多様な組織から流失し散逸しようとしていた美術工芸関係の物品を購入して補充していく。この新規の蒐集に敏腕を発揮したのが，1785 年から 92 年まで初代館長を務めたヴァンデルモンドである。国民公会も共和暦 3 年雨月 23 日（1794 年 2 月 11 日）付の法令で，公共教育に有益な書籍，器具，その他の工芸品を蒐集するための臨時委員会の設置を定めた。同年葡萄月 19 日（1794 年 10 月 13 日），グレゴワール神父の提案を法令にして，国民公会は Conservatoire を正式に発足させるのである。この機関はあらゆるジャンルの機械器具類，設計図，書籍などの保存が最初の目的であった。次の目的はこれら機械器具類の構造の知識とその使用法の習得を関心ある人たち特に職人層に普及させることにある。そのため手狭になり老朽化している旧小修道院の改造拡大が必要となった。幸い武器製造工場が移転してその跡地が利用できるようになり，元老院の後押しもあって，サン‐マルタン修道院本部も入手して，拡充問題は解決する。農商務省の管轄となった工芸学校は，無料の公開講義を行ったが，職人や労働者が出席できるように，彼らの仕事が終った夕方から開始された。旧礼拝堂の広いホールには多くの機械類が展示されて実習に供され，また実験室では各種の実験実習も行われたのである。授業料が無料の上に優秀な教授たちの講義と最新の器具を使用しての実験が多くの聴講生を誘引し，青年たちが多かったが，なかには外国人の教師や工業の進歩に興味を持つ一般人も多かった。誰にでも広く門戸を開いた自由聴講の制度は，ソルボンヌやコレージュ・ド・フランスのそれと同じく，大革命の精神に則っているのであり，この伝統は今日も生きている。

20）Institut national de musique：国立音楽演劇学校 Conservatoire national de musique et déclamation の前身。音楽学校の歴史は古く，1671 年にシャンベールとペラ

ンなる人物が王立音楽学校 Académie royal de musique を創設したのに始まる。彼らは学生を大聖堂の聖歌隊の少年たちから募集した。1672 年に宮廷音楽家のリュリ（1632-1687）がオペラ座で王立音楽舞踊学校 Académie royale de misique et de danse を開設している。1698 年にはル・ロショワ嬢なる人物も音楽学校を開校している。1784 年に参事院の評決で王立歌手学校 Académie royale de sujets chantants の創立を定めた。1789 年 8 月パリ市が国民衛兵の軍楽隊を結成するため 70 名の演奏者の募集をベルナール・サレット（1765-1858）に命じた。このため彼は音楽学校を設立，1793 年には国民公会から「国立音楽学院」設立の認可をもらった。彼は 1796 年から 1814 年まで校長を務めた。音楽教師 115 名，生徒 600 名で授業料は無料の予定だった。1795 年 8 月 3 日にこの学院の名称は廃され Conservatoire de musique と改名された。教授陣の内容はドレミ音名による読譜唱法のソルフェージの教授が 14 名，クラリネット教授が 19 名，フルート担当 6 名，オーボエ担当 4 名，ファゴット担当 12 名，第一ホルン 6 名，第二ホルン 6 名，トランペット 2 名，トロンボーン 1 名，蛇状管楽器セルパン 4 名，ビュクサンらっぱとチューバ 1 名，シンバル 1 名，ヴァイヨリン 8 名，バス 4 名，コントラ‐バス 1 名，クラヴサン 6 名，オルガン 1 名，母音発声法 3 名，単純歌 4 名，朗唱歌 2 名，伴奏 13 名，作曲 7 名である。校長 1 名，教頭 1 名，教員 125 名，男女学生 600 名であった。

1800 年に改革があり学生数は 400 名となり，校長の下に監事 5 名，書記 1 名，司書 1 名が配され，1 年クラスに教員 30 名，2 年クラスに教員 40 名が配属された。学校はパリ第 9 区コンセルヴァトワール街 2 番地のオテル・デ・ムニュ‐プレジールに設置された。1811 年 7 月 7 日にコンサート・ホールが新築され，1866 年に改築されて現在に至っているが，音響効果抜群のホールである。1810 年 8 月 3 日，シャプタルにより附属図書館建設の礎石が据えられた。王政復古になりサレットは解雇され，学校名は王立歌学校 Ecole royale de chant と改名されるが，1830 年の 2 月革命以後再び旧名の Conservatoire に復した。1913 年に学校は第 8 区マドリッド街 14 番地に移転したが，ホールと図書館は現在地にとどまっている。1905 年から 1920 年まで作曲家ガブリエル・フォーレが校長を務めている。

21）Archives nationales：憲法制定国民会議により，1790 年 9 月 12 日の法令により設置された。フランスの歴史に関与した重要なすべての文献，歴代王家の財産目録，条約原本，憲法関係書類，教会関係文書，地図，図面，土地台帳，パリ高等法院を中心とした裁判記録，大革命以降の議会議事録，重要人物の私文書など，中世以来の古文書を収蔵し，

その書架の長さは全長300粁以上に達している。大革命の激化と共に，旧制度の遺物としての古文書などは破棄してしまえという一部の過激派の主張は，過去の記録を保存し歴史から未来への指針を探るべきだという理性ある伝統派の反論によって否定される。しかし多くの古文書や記録が散逸した事も事実である。共和暦2年霧月12日（1793. 11. 2.），国民公会は古文書館の必要性を確認し，フランス全土の古文書の収蔵を定めたため，廃止された宗教団体の多数の貴重な古記録を救済することができた。1808年，国立古文書館は「フランス帝国中央古文書館」Archives centrales de l'Empire Françaiseと改称され，パリ第3区と第4区にまたがるフラン－ブルジョワ街60番地にあるスービーズ館に移転する。この邸は1697年フランスの名家ロアン－スービーズの当主スービーズ公フランソワの二番目の妻アンヌ・ド・ロアン公妃が購入したもので，それまでは前の持主ギーズ家の邸でギーズ館と呼ばれていた。アンヌはルイ15世の愛人の一人で，国王から多額の援助金を得てこの豪邸を購入し更に豪華に内部の改造したのである。

古文書館は1793年の創造以来，最初は第1区と第9区にまたがるサン－トノレ街229番地のフイヤン修道院の図書館に設置されたが，次に237番地のカプサン－サン－トレノ修道院へ，やがて王妃カトリーヌ・ド・メディシスの建造した第1区ルモニエ将軍大通りにあったチュイルリ城へ，さらに第1区から第4区にまたがるパレ大通り9番地のブルボン宮へと移転していったが（1799-1808），手狭になったため，1808年にナポレオンによりスービーズ館への移転が決定されたのである。ナポレオンは，1812年3月21日，古文書館専用の館をコンコルド橋からイエナ橋までの左岸の河岸に新築しようとし，礎石を据えたが，この計画は実現しなかった。収蔵文献は一般に公開されており，誰でも自由に閲覧できる。

22）couvent des Petits-Augustins：パリ第6区ボナパルト街14番地にある。この修道院の起源はかのマルゴ女王が，パリに聖ヤコブに捧げる神殿を建立しようとして，セーヌ街の2番地から7番地にひろがっていた自邸の庭園の南端に礼拝堂を建立した事からである。礎石の銘文に曰く，「1608年3月21日，偉大なる国王フランソワの孫にして，三人の国王の妹，ヴァロワ家最後の生存者であられるヴァロワ公爵，マルグリット王妃は，ヨブとヤコブと同じく，神の訪れと救いを得られたまい，ヤコブの誓願を神に誓いしところ，神はその誓願を聞きとどけたまいしにより，王妃はこの修道院を建立され，ヤコブの祭壇の場とされて，神意により賜わりし恩寵に感謝し，この場所にて慈善活動を永遠に続ける事を欲せられた...」

ところが，彼女が最初にこの修道院に招いたオーギュスタン派の修道士たちが聖歌を正しく歌っていない事が発覚したため，王妃は彼らを追放し，改革派のオーギュスタン派を新規に招いて宗務を委任した。1613 年の事である。彼らが俗に「プチ - ゾーギュスタン」と呼ばれていたため，その名称が定着したのである。建物全体の完成はアンヌ・ドートリッシュ王妃の頃までかかった。修道士たちは哲学と神学の研究に専念し，傑出した名僧もでている。

1790 年にこの修道院は廃止され，アレクサンドル・ルノワール（1762-1839）により，彼が生命の危機をかえりみず身を挺して革命の過激派の破壊の手から救った貴重な美術品類を展示する美術館に変身する。次に現在の美術学校がこの跡地に建設されるが，1820 年から 32 年まではドブレにより，次に 1858 年から 62 年まではデュパンにより続行されて落成する。

23）Marie Alexandre Lenoir（1762-1839）：パリ生れの考古学者。最初ドワイヤンに就いて絵を学ぶ。大革命勃発後の 1790 年，修道院が所有している美術品をパリに蒐集する着想を得たのは立憲議会が修道院の廃止を決議したからである。貴重な文化財を散逸と破壊から守るための彼の計画は幸いにして議会に承認され，同時に彼は蒐集品の展示と保管のためプチ - ゾーギュスタン修道院に設置された博物館の館長に任命された。彼の努力により，多数の貴重な作品が保存され現在に至っている。絵画，彫刻，貴金属製品の他に，有名人の墓石や石棺なども蒐集され，チュレンヌ，デカルト，モリエール，ラ・フォンテーヌ，アベラールとエロイーズの遺品も確保され，ルイ 12 世，フランソワ 1 世，アンリ 2 世らの美事な霊廟も保護された。

彼はジョゼフィーヌ・ボナパルトから彼女のマルメゾンの邸の装飾を依頼され，私有の美術館長に任ぜられた。王政復古になると，1816 年 12 月 18 日の勅令により，ルノワールが管理していた文化財はすべて旧所有者の修道院や教会に返還される事となり，彼の博物館の役目は終った。しかし同じ勅令により，ルノワールはサン - ドニ教会記念建造物管理官に任命され，歴代のフランス国王の墓所の修復を命じられた。若い時に喜劇も書いた彼は，考古学や美術に関する多くの著書があるが，代表作としては『フランス記念建造物博物館』*Musée des monuments français*（1804 年刊，全 8 巻，in- 8 ）があげられよう。

24）les fermiers généraux：国王に代って人頭税，塩税，煙草税，入市税などの徴税を代行する権利を国王から買収した人を指す。国王は纏った金額を一括して入手できたし，また必要とあれば翌年や翌々年の税収も前倒しで借用できる利便性があった。徴税請負人

たちは国王に上納した金額より遥かに多額の金額を徴収を許可された部門や農地から搾取するのが常だった。取られる側の涙と血の金で，徴税請負人たちは贅沢な生活を送っていたから，民衆の憎悪と怨嗟の的となり，大革命勃発と共に人民の敵，反革命分子として告発され35名の者が処刑された。徴税請負で得た金を研究と実験に捧げ近代化学の基礎を築いた偉大なる科学者ラヴォワジエも，この前歴を問われ，1794年5月8日に処刑されており，当時の民衆の盲目的憎悪の烈しさが想像できよう。パリ市の徴税請負人が手中にしたのは，パリ市に搬入される食糧品に対する入市税で，このため毎日消費する飲食物が高騰するので，入市税と徴税請負人が憎悪の対象となった。徴税請負人は商品が市内に密輸入されるのを防止するため市を取り巻く城壁を補強し，また途切れているような個所には壁や柵を新築して警備を厳重にした。立憲議会は民衆の要望にこたえて1791年2月に入市税を廃止するが，そのため市当局の財政はたちまち大赤字となったため，共和暦7年葡萄月27日（1798. 10. 18.）に総裁政府は公共のためと称して入市税を復活した。しかし徴税請負人制度は立憲議会により1790年12月2日に廃止されたが，入市税は度重なる廃止の要求にもかかわらず存続し，1948年12月9日の政令により1949年1月1日から廃止された。

25）Jardin des Plantes：第5区のセーヌ川左岸サン‐ベルナール河岸に面しているが，所在地としては園の西側のジョフロワ‐サン‐ティレール街40番地になる。ルイ13世の侍医で植物学者であったジャン・エルアールの進言により，1626年に設置が決定した。彼は，薬草栽培と医科生の教育実習のため必要である，と主張した。彼の同僚ギ・ド・ラ・ブロスが，国王より用地取得の命を受け，1633年2月21日，サント‐ジュヌヴィエーヴ修道院から，当時はまだパリの城外のフォーブール・サン・ヴィクトワールの外れの土地24アルパン（1アルパンは地方により面積が異なるが，約30乃至50アール）を，67,000リーヴルで購入した。ラ・ブロスはこの新設の「王室薬草園」Jardin royal des Plantes médicinales の園長に任命された。彼は，薬草の蒐集に努力しており，1635年には既に1,800種を集めていた。薬草園は1640年に公開される。

パリ大学の反対にも不拘，ここで植物学と化学の講義が行われ，1643年からは解剖学講座も新設される。有名な学者たちが教鞭をとったが，最も有名な人物はジョルジュ・ルイ・ルクレル・ビュフォン伯爵（1707-1788）で，薬草園の機構施設を組織化し，ほぼ今日の植物園につくりあげた。

現在の植物園は21の講座をもち，動物学，植物学から考古学，古生物学に及んでいる。

体系的に分類された 15,000 種の標本，25 萬冊の蔵書を誇る図書館には，ルイ 13 世の弟ガストン・ドルレアンのために製作された 8,000 枚に及ぶ動植物画を収めた 103 冊の貴重なコレクションもある。

研究用の小動物園の設置を立案したのは，純愛小説『ポールとヴィルジニー』の作者として有名なジャック・アンリ・ベルナルダン・ド・サン‐ピエール（1737-1814）である。最初は，縞馬，犀，ハーテビーストの 3 種から発足したこの小動物園も時代と共に充実し，1827 年 6 月 30 日，エジプトのパシャからシャルル 10 世に贈呈されたキリンは，パリ市民にとって一大事件となった。

1793 年 6 月 10 日，哲学教師であり国民公会の公共教育委員会の議長でもあったジョゼフ・ラカナル（1762-1845）の努力で，植物園は国立自然博物館に衣更えし，12 の講座が新設され，研究施設としても発展する。鉱物学にドーヴァントン，ブロンニャール，実験化学にフールクロワ，ゲー‐リュサック，動物学にド・サン‐フオン，ドーブレなど，錚々たる碩学が教鞭を執っている。

26）Théophilanthropes：総裁政府時代に誕生し消滅した自然神教的一派。この宗派の信徒は，18 世紀の哲学思想，特にヴォルテールの自然神教 deisme とルソーの国家における宗教の必然的役割についての理念に影響されている。彼らは，神への信仰が公共の秩序の維持に不可缺であると同様に，個人のモラルの維持にも必要であると信じていた。また宗教感情は大多数の人の中に多かれ少なかれ潜在的に存在しており，人間が祈りの必要に駆られた時のみにその欲求を満足させるべきで，いたずらに事を急いではいけない，と考えていた。彼らは特にルソーが『サヴォワの助任司祭の信仰告白』*Profession de foi du Vicaire savoyard* の内で展開した独自の熱烈な自然神教論に感動した。この新宗派の創設者の一人というべき人物は出版業者ジャン‐バティスト・シュマン‐デュポンテス（1761-？）で，彼が 1796 年に出版した著書 *Manuel des théanthrophiles* が信徒たちの聖書になった。彼らはルソーの影響を受け神の存在と霊魂の不滅を信じ，ロベスピエールの挙行した祭典の最高存在の信仰と一脈相通じるものがあり，「神の人間の友」である事を誇った。この宗派の信徒の最初の集会を主催した人物が，著名な鉱物学者で結晶学の創始者でもあったルネ・ジュスト・アユイ神父（1743-1822）である。彼らは週一回会合し，互いの道徳心を鼓吹し，哲学書を輪読し，賛美歌を歌って神を称えた。彼らは個人の内で眠っている宗教的感情，信仰心は共同で一緒に語り合い祈ってこそ覚醒すると信じたのである。この集会のための場所の確保だが，幸いな事に信徒の中に総裁政府のメンバーの一

人ルイ・マリ・ラ・ルヴェリエール-レポ（1753-1824）の尽力により，パリ市内の教会を使用してよいという事になった。教会での集会は，最初は木曜日に開催されていたが，後に日曜日に変更になった。カトリックのミサの後で行われたこの新宗派の会合に，最初のうちは多くの民衆が参加したが，その教義が理解されるにつれ参会者は減少し，特に再興してきた反動的新聞の嘲笑の対象となってから，人気を失ってしまった。しかし熱心な信徒らにより細々ながら集会は続行されたが，共和暦10年葡萄月17日（1801. 10. 21.）の法令により教会の使用を禁止されたのは，この宗派がジャコバン派のシンパと疑われたからである。この禁令の後，間もなくこの新宗派は歴史の闇の中に消え去ってしまった。

27）église Saint-Etienne-du-Mont：第5区にある同名の広場に面している。サント-ジュヌヴィエーヴの丘の上で，パンテオンの近くである。フィリップ・オーギュストの治世の末頃，この丘の住民たちが増加したため，自分たち独自の教会を持とうという気運が生じた。しかしそれまで彼らが通っていた教会の所有者のサント-ジュヌヴィエーブ修道院が新教会の建立に反対した。1222年にパリ大司教が修道院を説得し，修道院付属教会としての建立が決定し，初期のキリスト教の殉教者聖エチエンヌに奉献される事になった。やがて人口が更に増加したため，手狭になったこの教会を拡大する必要に迫られる。しかしここでも修道院が新築に必要な広い敷地を提供する事に反対した。墓地の一劃を提供しても城壁が邪魔だからそれを取り壊す許可を国王シャルル8世から取りつけ，更に新教会の鐘楼は修道院の屋根より高くしないという条件で，修道院は教会の新築を承認する。1328年の事であった。しかし工事が着工されたのが1492年である上に，その進行は極めてスロー・テンポで，正面玄関の礎石をマルゴ女王が据えたのが1610年8月2日，完成したのが1626年2月25日でルイ13世の時代である。134年という年月がかかった訳である。そのため教会全体はフランボワイヤン・ゴシック様式だが，正面玄関はルネサンス様式になっている。

この教会は大革命により大きな被害を被った。1793年に閉鎖されると，多くの美術品が馬車19台に積まれ，ルノワールのフランス記念物博物館に持ち去られてしまう。また正面玄関の彫像は破壊される。1795年にはtemple de la Piété-Filialeとして敬神博愛教に貸与され，1803年にやっと旧状に復する。1805年1月12日，ナポレオンの戴冠式のためパリに滞在していたローマ法王ピオ7世がここでミサをしている。またパリ大司教シブールが聖務停止処分を受けた司祭ヴェルジェールに暗殺された。第2帝政時代バルタールにより修復され，1862年に破壊されたすべての彫像が復現された。この教会は付属の

墓地をもち，多くの有名人が埋葬されているが，1662 年 39 歳で歿したブレーズ・パスカル，1699 年 60 歳で歿したジャン・ラシーヌがいる。

28）église Suint-Eustache：第 1 区のジュール街 2 番地にある。1969 年にパリ郊外のランジスに移転した中央市場で働く人々や附近の住民のために聖史劇上演の組合長のジャン・アレが国王フィリップ・オーギュストから建築許可を得て建立した聖女アグネスのための小さな礼拝堂がこの教会の起源である。1135 年国王ルイ 6 世が創設した市場が手狭になったため，1183 年にフィリップ・オーギュストが拡張し 2 棟の建物を建築しさらに塀を周囲にめぐらし盗難に備えた。雨天でも支障なく商売が出来るようになったので，国王はその代償として取引税を徴集していたが，常に手元不如意を嘆いていた国王に献金をして，アレが礼拝堂建立の許可を得たのである。市場関係者のつくった新しい住宅地ブール・サン‐ジェルマンの教区の教会はルーブル宮の前にあるサン‐ジェルマン‐ロクセロワ教会で，彼らの所から遠かったため，手近かに自分たちの教会が欲しかったのである。10 年後サン‐ドニ大修道院から聖ユスタッシュの遺品がこの礼拝堂に寄贈されたのを機に，聖ユスタッシュ礼拝堂と名を変え，1303 年に教会となり自分の教区を持つことになった。聖女アグネス（フランス語読みでアニェス）は紀元 304 年に 13 歳でローマで殉教している。聖ユスタッシュはトラヤヌス帝治下のローマの将軍で，キリスト教に改宗したため，妻と 2 人の息子と共に，真っ赤に熱せられた青銅の牝牛の像の中に閉じこめられて焼き殺されたという。

パリの発展と中央市場の繁栄と共に，教区には富裕な商人たちが住みつくようになり，彼らは自分たちの富にふさわしい立派な教会，できれば大聖堂を創建しようと願った。1532 年に起工され，資金難のために工事は延びたが，ともかくも 105 年後の 1637 年に完成し，奉献式にパリの初代大司教ジャン・フランソワ・ド・ゴンディを迎えたのである。ゴチック様式だが一部にはルネサンス様式もみられるパリで最も美しい教会の一つである。奥行 100 米，間口 44 米，ドームの高さ 34 米で，ルイ 14 世の宰相コルベールをはじめ，史上有名な人物が多く埋葬されている。1793 年に閉鎖された教会は掠奪により荒廃したが，1795 年に再会され，敬神博愛教団に 1797 年から 1802 年にかけ貸与された。1844 年に火災にあい，またパリ・コミューヌの乱で被害を被ったがその都度修復され，1928 年から 1929 年にかけての修復工事で完全に原状に復した。

29）église Saint-Nicolas-des-Champs：パリ第 3 区から第 4 区にのびるサン‐マルタン街 254 番地にある。この教会はサン‐ニコラ‐デ‐シャン小修道院の奉公人たちや周辺地

区の農民たちのために建立された。この教会はローマ法王カリクストウス 2 世（在位 1119-24）の教書に記されている。1119 年 11 月 27 日の日付である。1184 年に拡大され教会に昇格した。この地区の住民の増加と共に何度か増改築され現在に至っているが，その時代の建築様式を反映し，1420 年から 1480 年の正面玄関と鐘楼と南側の側廊はフランボワイヤン様式，1576 年から 1586 年の第 2 の南側廊と北側廊，南側の脇門などはルネサンス様式などで建築されている。またステンドグラスは 17 世紀と 18 世紀のクラシック様式に改造された。1793 年に閉鎖されて敬神博愛教団の聖歌教会となったが，1802 年にカトリック教会に復帰している。この教会にはコレージュ・ド・フランスの創設者の一人ギヨーム・ビュデが 1540 年に 73 歳で歿し，また女流作家スキュデリー嬢が 1701 年 94 歳で歿して，共に埋葬されているが，この他にも多くの有名人が眠っている。

30）église Saint-Sulpice：パリ第 6 区サン - シュルピス広場に面する。17 世紀末にあったサン - ジェルマン - デ - プレ地区の小さな教会はサン - ペールまたはサン - ピエール礼拝堂と呼ばれていたが，修道院関係者や日増しに多くなる周辺住民を収容するには余りにも手狭になったため，新教会を建立しようという事になった。1211 年頃のことである。この教会は 621 年から 624 年までブールジュ司教を務め国王クロテール 2 世（584-628？）の王宮司祭であった聖シュルピスに捧献された。しかしこの教会もサン - ジェルマン地区の住民の増加と共に狭小となり，より大きな教会を新築する事が決定され，1646 年 2 月 20 日アンヌ・ドートリッシュが定礎式を挙行した。工事は建築家の死去や資金難のため何度か中断したが，103 年後の 1788 年にやっと完成した。この間 6 名の建築家が建設に携わったが，時代の変遷と共に流行の様式も変ったため，統一のとれていない箇所もある。その最も顕著な部分は 2 つの塔で，南側の塔は内部は 8 角形で曲線の円い屋根を持ち，最上部は円筒形をしており，高さ 68 米である。北側の塔は 4 角形で 3 角形の屋根を持ち，最上部は南と同じく円筒形で，高さは 73 米である。これほどに異なった塔が並立しているのは珍しい。しかしこの教会の内部の規模はパリ最大で，縦 110 米，横幅 56 米，高さは 33 米もある。因みにノートル - ダム大寺院は縦 130 米，横幅 48 米，高さ 35 米である。1793 年には敬神博愛教団の「勝利の神殿」となり，ラ・レヴェリエール - ルポが集会の司会を務めた。政治家カミーユ・デムーランが結婚式をこの教会で挙行しているが，ロベスピエールが証人の一人として出席している。また霧月 18 日のクー・デタの三日前の 1799 年 11 月 5 日，ナポレオンとモロー将軍が出席した 700 名の大宴会がここで開催され気勢をあげている。この教会には 1692 年 58 歳で歿した女流作家のラ・ファイエット夫人や

1700 年に歿したモリエールの妻アルマンド・ベジャールらの有名人が埋葬されている。

31）補注：les Tivolis：パリ第 8 区から第 9 区にのびるサン‐ラザール街 66 番地から 106 番地まで広がっていた遊園地。金満家の徴税請負人シモン‐シャルル・ブータンの息子の一人が建設した。ロック・ガーデンや人工的廃墟や芝生の球戯場（英語の bowling green から派生したフランス語 boulingrin）に，いくつかのパビリヨンを建設し，花火，ダンス・パーティー，芝居などを開催しパリ市民を誘った。豪華な催し物と素晴らしい庭園は，木曜，日曜，祝日には無料開放されたので，ますます人気はたかまった。最初は「フォリ‐ブータン」と称したこの遊園地はローマ郊外にあったハドリアヌス帝の有名な別荘と豪華な庭園で名高い「ティヴォリ」に改名される。1793 年にブータンの息子が処刑されると，国民公会議員ジェラール・デリヴィエールが経営を引き継いだ。かっては王妃マリ・アントワネットが公然と散策を楽しんだこの遊園地はこれ以後も繁昌を続け，当地の伊達男ミュスカダンや洒落女メルヴェイユーズたちを誘引して，一萬人もの客が日曜日毎に殺到した。1799 年総裁政府はブータンの遺産相続人にこの遊園地を返却し，彼らは見世物の興行などを 1825 年まで続けたが，時代と共に新しい遊園地の出現や流行の変化などにより徐々に人気を失い，1810 年 8 月 30 日閉園した。

（続　く）

（追　　記）

（1）　参考図書などは，〔Ⅰ〕の巻末に掲載してありますので，そちらを御参照下さい。

（2）　前稿〔XVII〕に校正ミスがありましたので，下線の如く御訂正下さい。

P. 5 . 下から 8 行目　マザラン公公認

P. 5 . 下から 6 行目　Beaufort

P.11. 上から 11 行目　阻止

P.15. 最初の 1 行目　阻止